植柳の風

八代市立植柳小学校　校長室便り
平成３１年２月１２日　ＮＯ．１２６

夢に向かって

「私は、水泳もボール運動も苦手でした。でも、陸上は両親がやっていたこともあり、４年生から部活動で始めました。一番、得意なのは、走り幅跳び。５年生の時、『日本一になりたい』という夢を持ちました。中学の時、県代表となり全国で５位。高校でも目指しましたがあと少しというところまで行ってもなかなか日本一になれませんでした。でも、ついに２０１５年６月、日本陸上競　技選手権大会でついに念願の日本一に三段跳びでなることができました。でも、それから約半年後の２０１６年１月、トレーニング中に重傷を負ってしまい、車いすの生活となりました。

車いす生活となり、駐車場やトイレ、エレベーターなどいろいろなところでまだまだバリアフリーにはなっていないことを感じます。目につかないような急な段差やデコボコの道がとてもきつい思いをします。だから、私は、バリアフリーの運動を広げたいという夢があります。もう一つ、東京パラリンピック日本代表になりたいという夢、この二つの夢に向かって頑張ります。好きな言葉に『失ったものを数えるな　残されたものを最大限に生かせ』というルートヴィヒ・グッドマン博士の言葉があります。私は、この言葉を胸に、次の夢に向かいます。」

２月８日（金）、「豊かな心を育むための講演会」を本校体育館で開催した。講師は中尾有沙さん。県大会では、三段跳び１０連覇、走り幅跳び９連覇、三段跳び日本一など輝かしいキャリアを誇る人だが、突然の事故により車いす生活を余儀なくされた。私は、中学時代の彼女の跳躍が鮮烈に目に焼き付いているし、実は、三段跳び日本一になられたばかりのときに県小体連主催事業「キッズアスリートフェスティバル」で指導をお願いしたときにお会いしている。それだけに、この怪我のことを聴いた時は驚くとともに、なんとか励ますことはできないかとやきもきしていた。きっと一時は絶望されたこともあるだろう。しかし、自宅でリハビリを続けながら、不屈の精神で、１００ｍや１５００ｍの車いす陸上に挑戦を開始し、第１７回パラリンピック県代表となった中尾さん。次の目標は、東京パラリンピック日本代表である。さわやかな笑顔で講演を締めくくった中尾さんのメッセージは、子どもたちや私たちにも力強く伝わってきた１時間だった。

講演の中で紹介されたルートヴィヒ・グッドマンさんは、ドイツのユダヤ系神経学者で、「パラリンピックの父」と言われる方である。ドイツで暮らしていたが、第二次世界大戦の戦火がヨーロッパ中に広がり、ナチスによるユダヤ人迫害が始まると、ドイツから英国へと亡命。やがて戦争が終わり、その３年後の１９４８年にロンドン北部のストーク・マンデヴィル病院で、戦争で脊髄を損傷し、下半身まひの患者たちのリハビリの一環として、車いすアーチェリー競技会を開催した。この競技会は年々規模が大きくなり、１９６０年にはローマ五輪に合わせて、同じローマで国際大会として開催された。これが第１回のパラリンピックと言われている。参加国も２３カ国、参加者 400 人という規模で、アーチェリーの他にも陸上、水泳、卓球、フェンシング、バスケットボールの全部で６競技が行われたという。

「残されたものを最大限に生かせ」心底にズシンと響く、実に重たい言葉である。